

弘前学院看護紀要の創刊によせて

看護学部長 神 郡 博

この度弘前学院大学看護学部から弘前学院看護紀要を発刊することになった。紀要に対する評価にはいろいろな視点がある。しかし、紀要には同じ分野の学問をするものの研究成果を発表できる場、それを通して、相互の理解や研鑽が深められるよさがあり、そこに価値を置こうとする姿勢は変わっていない。

看護の世界では、最近種々の学会が次々にでき、それぞれが肥大化し、きめ細かな討論や理解の場が十分にえられない傾向がある。そればかりか、発表の機会さえ制約される現状もある。このことを考えると、身近に紀要を持つよさを改めて痛感せざるをえない。

本学部が発足の年から紀要の刊行に踏み切れたことは、この意味で大変喜ばしいことである。改めて編集に当たってこられた片桐康雄先生はじめ関係の先生方に敬意を表する次第である。

何事によらず継続は大事なことである。これは紀要についても例外ではない。このためには、各自が常に課題を持ち研究をすすめ、それをこまめにまとめ発表する習慣を持つことが大事である。それを基に同学の士が胸襟を開いて、検討を重ね、研鑽を積み、相互が成長できる場が必要である。この二つの事柄は、相互に表裏をなすもので、その良し悪しが紀要発展の鍵を握っているといってもよい。

看護の世界は学際的である。それぞれの理論や技術、行為や効果を考える上で、看護独自の学問以外に既存の多くの学問領域の知見を援用しなければならない。研究の手法や用具、その進め方や結果の評価についても同様である。このため、量的研究、実験的研究など従来からの研究方法に加え、質的研究も重視され、各種の評価方法が用いられている。したがって、看護の研究の中には、いろいろな視点から総合的に評価をしなければならないものが少なくない。この評価には自然科学ばかりでなく広く人文科学の視点も加味しなければならない。あるいは少し長い目でその動向を見守る必要のあるものもある。

こうした点から考えると、前述の同学の士が胸襟を開いて研鑽できる場は特に重要である。幸い、本学には、学内に看護、医学、情報科学、社会科学、人文科学、文学など広い範囲の専門家が多数いる。これからこれらの専門家の知恵もかりて、本紀要が益々充実したいものになるとよいと考えている。